

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	バルザック <i>La Peau de chagrin</i> (『あら皮』) — 「幻想に隠された広大な構想」 —
氏 名	吉野内 美恵子

論 文 内 容 の 要 旨

邦訳では『あら皮』と訳されているバルザックの *La Peau de chagrin* (1831) は、「人間喜劇」の「哲学研究」に分類され、これまで「悪魔に魂を売った欲望の小説」として読まれてきた。一見単純明快なプロットのように見えるこの作品は、テキスト、パラテキスト共に多くの謎と矛盾を包含している。特に「エピローグ」の文章はあまりに抽象的で曖昧なため、いまだに明確な解釈が得られておらず、*La Peau de chagrin* の結末がはっきりしない。また、作家の手になる「モラリテ」は初版と第二版のみで削除され、その内容は主題であるはずの「欲望」とは一致しない。こうした難解な文章を読み解くヒントを、バルザックは初版の「序文」に記していたようだが、作家の「序文」は一か月で消失し、第二版(1831)から1833年版には作家の関与が大きいと考えられているフィラレート・シャルルの「序文」が付されることになる。その「序文」には「幻想に隠された広大な構想は多くの人の目に留まらなかったに違いない。批評家たちは *La Peau de chagrin* が社会的個性を取り除いた、人間の人生を表現したものだと理解しなかった」と記されている。「幻想に隠された広大な構想」とはいったい何を意味するのか。もしかすると作家が意図的に隠した構想は、いまだに幻想のヴェールで覆われたままで、読み手はまだその核心に触れていないのではないか、テキスト、パラテキスト間の「ズレ」もそこから発生するのではないかという疑問が湧いてくる。そこで、本論文では、「幻想に隠された広大な構想」を明らかにすることを目的とする。

第一部「*La Peau de chagrin* 研究の背景」では、第一章で「バルザックの作品に対する評価」と『あら皮』の先行研究について述べた。リンダ・リュディックが取り上げた二種類の批評的立場に言及し、*La Peau de chagrin* の解釈の問題点に迫った。バルザックは「人間喜劇」の「総序」の中で、「*La Peau de chagrin* は「風俗研究」と「哲学研究」をほとんど東洋的な幻想的な環で結びつける」と述べているが、リンダ・リュディックは「リアリスティックな面だけに目を向けると、「風俗研究」のみに目を向

けることになるが、一方で「哲学研究」にとらわれるとリアリスティックな内容を全面的に無視してしまう傾向に陥る」と論じた。先行研究史を辿ることで、作品の謎を解明するためには多方面からのアプローチが不可欠であることがわかった。

第二章では、*La Peau de chagrin* の底本になったと思われるダンテの『神曲』、第三章では、作品に大きな影響を与えたゲーテの『ファウスト』、第四章では、*La Peau de chagrin* の「モラリテ」でバルザックが称賛したフランソワ・ラブレーの『ガルガンチュアとパンタグリユエル』について詳述した。

第二部の「序文の翻訳」では、第一章で初版の「序文」、第二章で1833年度版、フィラレート・シャルの「序文」の校註・訳を試みた。フィラレート・シャルの序文には「著者が細心綿密に書き、次いで犠牲にしてしまったこの序文〔初版の序文〕には、我々がそれをここで再現しなければならないと考える普遍的且つ哲学的な考察が含まれていた」と記されている。作家の哲学的考察を知るうえでフィラレート・シャルの「序文」は極めて重要である。

第三部では、『神曲』の間テクスト的なアナロジーに注目して *La Peau de chagrin* のテクスト・パラテクストと『神曲』の比較・分析を行った。第一章では、「『追放された者たち』と『神曲』の関連性」について論じた。「エピローグ」は『神曲』を想起させるが、1963年ルネ・ギーズは、「バルザックは『神曲』を完全には読んでおらず、ダンテを理解していなかった」と論述した。そこで *La Peau de chagrin* と同時期に執筆され、ダンテが実名で登場する『追放された者たち』をバルザックが読んだと思われるアルトー・ド・モンロー版の『神曲』(1828-1830)と比較・分析した。その結果、『追放された者たち』には、『神曲』の宇宙観、天使の位階など、ダンテの神秘思想が散りばめられていることから、バルザックが『神曲』をよく理解していたことがわかった。

第二章では、「エピローグの分析と考察」を試みた。「エピローグ」全体が『神曲』の「煉獄篇」と「天国篇」の描写に倣って描かれており、色彩は美德を、焰や火花は天使を象徴することからポーリーヌは天使として描かれていると解釈した。また、1838年刊行のルクー版の「エピローグ」には、ラファエルとポーリーヌの乗った船が光に向かって進む挿絵が描かれ、『追放された者たち』には「神は、神は光だから…」という言葉が記されていることから、*La Peau de chagrin* の結末は「天国」であると確信した。だが、それでは、地獄を示唆するラストシーンと天国を示唆する「エピローグ」との間に大きなズレが生じてしまうのである。

第三章と第四章では、*La Peau de chagrin* のテクストと『神曲』の比較・分析を行った。難解な文章はメタモルフォーズの解明によって端緒が開けるものと考え、骨董屋や主要人物を中心にメタモルフォーズの解明に努めた結果、メフィストフェレスと神をイメージさせる容貌を併せ持つ老骨董商は、「メフィストフェレス」だけではなく、

「神」のメタモルフォーズでもあると考えた。老骨董商の台詞には「心で読む物語」という言葉があり、『追放された者たち』には「かの地獄と煉獄の奇妙な寓話」と記されていることから、*La Peau de chagrin*には「字義通り読む物語」と「心で読む物語」が存在し、前者は「悪魔（メフィストフェレス）との契約」を描いた「地獄の物語」、後者は「神との契約」を描いた「煉獄の物語」ではないかと推察した。テキストには、キリスト教の七罪を犯し、その罪を浄化するラファエルの姿が描かれており、*La Peau de chagrin*には「地獄」と「煉獄」、二つの物語が存在することが確認できた。特に「煉獄の物語」には、浄罪を促進する「生者の祈り」、額に刻まれた罪の烙印、煉獄の責め苦としての咳の症状などが緻密な技巧で描かれていた。また、これまで *La Peau de chagrin* はゲーテの『ファウスト』の影響を大きく受けていると言われてきた。確かに「悪魔との契約」で死に至るプロットは類似している。だがファウスト博士とラファエルを「自由意志」の視座から比較すると、ファウストは自由意志で「悪」を選び「悪魔との契約」を全うするのに対し、ファウストの運命を拒み自分の罪を心から悔いたラファエルは自らの意志で「善」を選びとり、罪を浄化して天国に至るので、「自由意志」の行使という点において、二人の主人公の行動は対照的であることが明らかとなった。

第五章では、「「あら皮」におけるサンスクリットの問題点」について論述した。初版では、「あら皮」に刻まれたフランス語の文言は、1838年度版ではアラビア語の訳文として添えられた。しかし、作家はその後老骨董商の台詞の「あなたはサンスクリットを流暢にお読みですな」の「サンスクリット」を「アラビア語」に修正しておらず、「あら皮」に刻まれたアラビア語と老骨董商の台詞との間に矛盾が生じてしまっている。これまで、「サンスクリット」を訂正しなかったのは作家の初歩的なミスと考えられてきたが、この点について考察した結果、「アラビア語」に修正しなかったのは初歩的なミスではなく、サンスクリットにこだわったバルザックの確固たる意志に基づくものであるとの結論に至った。

第六章では、「エピグラフ」のデッサンについて論述した。バルザックはこのデッサンが何を意味するのか明言しておらず、「エピグラフ」のヘビ様のデッサンは、『トリストラム・シャンディー』322章からの引用であると記されている。プレイヤッド版はこの引用箇所を指摘し、バルザックはスターンと同じ意味合いでデッサンをしているのではないと二つのデッサンの関与をはっきり否定している。けれども引用箇所を検証した結果、バルザックは間違っていないことが判明し、作家は「ヘビ」をイメージさせることで主題が「欲望」である事を強調しつつも、また一方では、「ヘビ」にしないことで『トリストラム・シャンディー』の自由との関連性を読み手に訴えているのであると考えた。

第七章では「モラルテ」を分析・考察した。「モラルテ」にはあたかもラブレールを引

いたかのような架空の引用文がある。その文章の« Peau »は「人生」、« chagrin »は「悲しみ」の意味で使われており、この場合 *La Peau de chagrin* は『あら皮』ではなく『悲しみの人生』と訳することができる。作家は多義性を利用し、一つの表題の下に『あら皮』と『悲しみの人生』、二つの寓話を紡いだものと思われる。また、同様の視点から、ラストシーンのポーリーヌの最後の言葉は「妖婦」と「天使」、両方の解釈が可能となり、これによってテキストと「エピローグ」間のズレが解消した。こうした多義性や反転図形の技法は、フランソワ・ラブレーが最も得意とするところである。*La peau de chagrin* は多義性を利用した二重構造となっており、「あら皮」の逆三角形の文字配列は『ガルガンチュワ』決定版(1542)の扉絵の文字配列に酷似している。また、*La peau de chagrin* は一方から見れば「地獄の物語」だが、他方から見れば「煉獄の物語」で、反転図形を駆使した描写であり、この技法はラブレーを模倣したものであると考えた。

『神曲』では、七罪を浄化したダンテは「エデンの園」に入るが、バルザックは『神曲』に倣って *La Peau de chagrin* を描きながらも「エピローグ」に「エデンの園」を描かずに、「モラリテ」でラブレーと「テレームの僧院」を称賛した。「エデンの園」と「テレームの僧院」を比較すると、どちらも楽園として描かれながら、「自由」という観点においては対照的な展開を見せる。バルザックは、自由の行使には「思慮分別を持って行動できる知」が不可欠と考え、僧院に入る条件を「知」、唯一の規則を「汝の欲するところをなせ」と定めたラブレーと「テレームの僧院」を「モラリテ」で称賛しているのである。ここに *La Peau de chagrin* と『神曲』との相違点がみられる。

テキスト・パラテキストの分析により次の結論に至った。冷たい現実社会を中心に描いた *La peau de chagrin* :『あら皮』は、「人間喜劇」においては「風俗研究」に分類される作品で、幻想の世界を中心に描いた *La peau de chagrin* :『悲しみの人生』は「神秘の書」に属し「哲学研究」に分類されるべき作品である。長い間論争の的になってきた「*La peau de chagrin* の「現実」と「幻想」、「風俗研究」と「哲学研究」とは何か」の答えがここにある。そして *La peau de chagrin* は初版の段階から「哲学研究」に分類されていることから、バルザックが読み手に本当に伝えたかったのは、『悲しみの人生』の方だったのではないかと考えた。バルザックは、1831年のタランベールに宛てた書簡の中で、「広大な構想を幻想に隠した目的は、悪意ある批評家たちの目を逃れるためだった」と告白している。以上のことから「幻想に隠された広大な構想」とは、*La Peau de chagrin* が二重構造になっており、『あら皮』、『悲しみの人生』、「エピローグ」で、「地獄」、「煉獄」、「天国」の流れを形成し、幻想の中にもう一つの *La Peau de chagrin* :『悲しみの人生』が隠されていることを示唆した言葉であるとの結論に達した。